

大学史ニュース

第21号

2021年7月31日 発行

目次	
◇「駅伝王国」時代のエース鈴木勇…………… 2	◇『昭和七年版 日本大学文科試験問題集』について …… 5
◇校友伊藤長次郎と渋沢栄一…………… 3	◇日本大学に在学した日本初の「婦人警察官」 …… 7
◇出征・入隊した教職員②…………… 4	



ロサンゼルス到着時の日本選手団



古橋が使用したトランク

全米水上選手権出場時のトランク

昭和24（1949）年8月、古橋廣之進、橋爪四郎ら日本の水泳選手6名（うち日本大学4名）がロサンゼルスで開催された全米水上選手権に出場しました。敗戦後、国際大会の出場を制限されていた日本が初めて出場したこの大会で、古橋は世界記録を連発し、敗戦で沈んでいた日本人の心に希望の光をもたらしました。

令和3（2021）年1月、日本水泳連盟に保管されていた古橋廣之進関係資料が当課に移管されました。資料点数は238点（総点数1,239点）で、写真や賞状、スクラップブックなどが含まれていますが、その中に古橋が全米水上選手権出場時に使用したトランクがありました。写真はロサンゼルスに到着した日本選手団で、このトランクを使用していることが確認できます。

「駅伝王国」時代のエース鈴木勇

令和3（2021）年2月3日付『読売新聞』朝刊に本学駅伝の歴史に関する記事が掲載されていると、中央大学大学史資料課の中川壽之氏から情報提供を受け、担当記者の小野仁氏の仲介により、寄稿された渡辺暁子氏と連絡をとりました。渡辺氏のご尊父が日本大学「駅伝王国」時代に活躍した鈴木勇選手であることが分かり、所蔵の駅伝写真をお送りいただきました。ここではその一部を紹介します。

鈴木勇は、山形県の出身で、昭和8（1933）年4月に日本大学専門部商科に入学し、卒業後は商経学部商業学科に進み、昭和14年3月に卒業しました。その間、箱根駅伝には第15回大会から第20回大会まで、6回連続して出場しています。表は、鈴木が出場した箱根駅伝の成績をまとめましたものです。4連覇の大会すべてに出場し、区間賞4回、2位1回、3位1回、そのうち第15・19回大会の第2区では、いずれも区間新記録という抜群の成績を残しています。現在、渡辺氏は箱根駅伝のメダル4個（記録章2個、参加章2個）を大切に保存されています。また、鈴木はマラソンにも挑戦し、昭和11年のベルリンオリンピックの日本代表最終予選で8位、同年の全日本選手権では優勝を遂げています。

写真①は、第19回大会（昭和13年）で4連覇を達成した直後に、小田原の小伊勢屋（合宿先）で撮影したものです。2列目左端（No.11）で、立って陸上競技部の部旗を持っているのが鈴木勇です。補欠の番号ですが作戦上のことで、第2区を走り4校を抜き先頭に立ちました（写真②）。2列目右から2番目（No.5）が鈴木房重で、第5区（山上がり）で活躍し、ベルリンオリンピック1万m代表選手ともなっています。勇と房重は、箱根駅伝4連覇で活躍した「エースのW鈴木」と称すべき選手です。1列目右端（No.8）が大澤龍雄です。昭和15年に3,000m障害で日本記録を樹立し、幻の東京オリンピック代表候補にもなりました。鈴木房重と大澤龍雄は、残念なことに太平洋戦争で戦死しました。

3列目右から3人目が永野準一郎（No.6）で、第6区（山下り）を走り区間賞を取っています。実弟の常平も陸上部に入学し、第21回大会（昭和15年）では兄弟で箱根駅伝に出場し活躍しています。常平は、第22回大会（昭和18年）の第10区で、先を走る2校を抜き「駅伝王座」を守りました（『日本大学大学史ニュース』第11号）。3列目左端が明地邦整（No.4）で、第4区を2位で走りました。翌年の第20回大会（昭和14年）では、第9区を2位でタスキを受け取りましたが、戸塚の「開かずの踏切」に引っ掛かってしまい、その後の猛追も及ばず5連覇を逸しました。明地は後々まで、「踏切がなければ…、横須賀線は見たくもない。いまだに乗りません」と涙ながらに語っていたといえます。

大会回数	区間	順位	日大順位()参加校	優勝校
第15回大会（昭和9年）	第2区	1位	2位（13校）	早稲田
第16回大会（昭和10年）	第9区	1位	1位（13校）	日大
第17回大会（昭和11年）	第9区	1位	1位（14校）	日大
第18回大会（昭和12年）	第10区	3位	1位（14校）	日大
第19回大会（昭和13年）	第2区	1位	1位（12校）	日大
第20回大会（昭和14年）	第3区	2位	2位（10校）	専修

箱根駅伝での鈴木勇の成績



① 4連覇の集合写真（渡辺暁子氏蔵）



② 第2区で快走する鈴木勇（渡辺暁子氏蔵）

写真③は、第21回大会（昭和15年）を前にした小田原の合宿所内の写真です。2列目左端が鈴木勇、前列右端が森本一徳（のち監督）、後列中央が丸三郎顧問（前監督）です。勇は前年に卒業していますので、応援に駆け付けたのでしょう。前大会で連覇が途切れたことから、「栄冠争奪之日」「奪還せよ紫の大旗」「奮起せよ日大健児」などの言葉が記された垂れ幕が見られ、選手らの闘志・気魄が伝わってきます。その言葉の通り、第21回大会では再び栄冠を獲得しました。

（小松）

【参考文献】

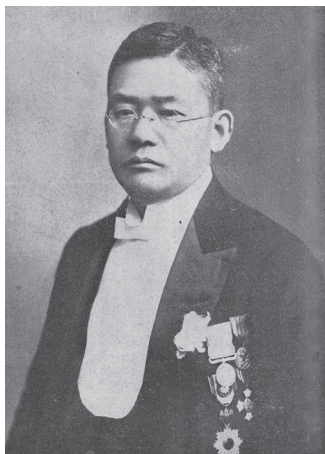
関東学生陸上競技連盟編『箱根駅伝70年史』

桜門陸友会「90年史編纂委員会」編『日本大学陸上競技部90年の足跡』



③第21回大会に向けての小田原合宿所内
（渡辺暁子氏蔵）

校友伊藤長次郎と渋沢栄一



伊藤長次郎

（『日本法政新誌』16巻2号より）

令和6（2024）年から新1万円札の肖像となる渋沢栄一は、現在NHKの大河ドラマ「青天を衝け」でも取り上げられ、注目を集めています。渋沢は、実業界の指導者として、多くの企業の設立に携わり、「日本資本主義の父」と呼ばれています。ここで紹介する校友の伊藤長次郎は、渋沢との関わりを持ち、その影響を受けた人物です。また、伊藤の長男熊三の妻總子（阪谷芳郎五女）は、渋沢の外孫にあたります。

伊藤は、明治6（1873）年4月に兵庫県印南郡伊保村今市（現兵庫県高砂市）に生まれました。姫路中学校、京都の顕道学校を経て、日本法律学校で学び、明治28年に家督を継ぎ5代目長次郎となりました（伊藤家の当主は代々「長次郎」を襲名）。伊藤家と渋沢との関わりは、江戸時代に同家が居住していた今市村が一橋領であったことが関係します。慶応元（1865）年、一橋家の勘定組頭並であった渋沢は、財政再建のため今市村に木綿会所を設置しました。4代目長次郎は、その運営に協力し、渋沢と密接な関係を持つようになりました。4代目長次郎は、木綿・穀類・干鰯などの商業活動を行っていましたが、一橋家との関係を機に土地の集積を始めました。明治になると、第三十八国立銀行、山陽鉄道、神栄生糸の設立に参加し、さらに土地の集積を積極的に進め、「兵庫一の大地主」と言われるまでになっています。

伊藤は家督を継ぐと、経済的活動はひかえめにし、地主として小作地の経営に力を注ぎました。明治38（1905）年に伊藤家農会を設立し、産米改良、精励者表彰、小作米品評会、耕地整理などを行いました。小作人信用組合も設立し、組合員が資金を出し合い、肥料の購入費など必要な資金を貸し出しました。また、果樹園を経営し、梨、桃、柿、葡萄などを栽培し副業を奨励しました。このように伊藤は小作人と協調を図ったことから、「模範地主」「温情地主」と呼ばれています。伊藤の活動の背景には、渋沢の「国家のため、人のために第一に考える」（公益優

先) という倫理観の影響があったと言われてます。

日本大学との関係では、大正9(1920)年の大学令による大学昇格のため1万円を寄付し、卒業生山下博章(のち本学教授)のドイツ留学(法学研究)に際しては支援を行っています。関東大震災後の大正12年10月に日本大学監事に就任し、大学の復興と発展にも貢献しました。

(小松)

【主な参考文献】

- ・「農政家として農事改良に尽くした大地主 5代目伊藤長次郎」『なびつま』(高砂商工会議所報) 令和元年10月発行
- ・庄司俊作『近現代日本の農村—農村の原点をさぐる』吉川弘文館

出征・入隊した教職員② — 『日本大学新聞』の記事から—

前号では昭和12~13年を取り上げましたが、所属や出征年が新たに判明した者もいるため、表は12年分から作成し直しました。『日本大学新聞』に掲載の戦没者は、昭和12年出征の3名のみ判明していましたが、12年出征の芸術科職員と13年出征者3名が新たに判明し、総数は7名となりました。しかし、14年以降教職員の戦没記事はなかったため、今号の表には欄を設けませんでした。

一見して分かるように、14年以降、教職員出征者の記事が急減し、「太平洋戦争」開始以降の17年~18年は記事がありません。しかし、『日本大学百年史』第2巻880頁の「昭和17年12月15日の応召教職員数」では110名となっています。表の合計人数78名(うち戦没者7名)とは大きな開きがあり、17年までの間に召集解除・復職している者もいるので、差はさらに広がります。

掲載数の減少は、紙面数が4~8ページ建てだったのが、紙の統制も始まり15年下半年からは基本4ページ建てとなったこと、検閲が厳しくなり部隊名や戦地の地名などが「○○○」と伏せ字になって、少ない紙面では情報を伝えきれないなどの要因が重なったためと考えられますが、まだ、十分な調べはついていません。今後、『日本大学新聞』の記事から学生・生徒の出征について調査する際に、併せて検証できればと考えてます。

『日本大学新聞』に掲載の教職員出征者・入隊者数

昭和12年~18年分調

出征・入隊年 部科別	昭和12年		昭和13年		昭和14年		昭和15年		昭和16年		年不明		合計	
	人数	内教練等	人数	内教練等	人数	内教練等	人数	内教練等	人数	内教練等	人数	内教練等	人数	内教練等
本部等	2		2										4	0
法文・商経	3	2	4	2					1	1			8	5
芸術科	1												1	0
工科	6	5		2	3	3	2	1				1	12	12
医科			11				1				1		13	0
歯科	2		5	1							1	1	8	2
予科文科	2						1						3	0
予科理科	2	2	1	1									3	3
第一普通部	5	1	3	2									8	3
第二普通部	7	3	5	2	1								13	5
第三普通部	1	1											1	1
第四普通部	3	1			1								4	1
合計	34	15	31	10	5	3	4	1	1	1	3	2	78	32

* 昭和17年・18年は掲載者なし。

* 文系の学部と専門部、工学部・専門部工科・工業学校・工学校では兼務者もあるため、まとめて1部科とした。

* 内教練等は、予備役軍人でその経歴により学校教練や訓育などに携わる職に雇用されていた者の人数。

○『日本大学新聞』第281号(昭和12年9月20日付)~第418号(昭和19年1月10日付)より。ただし、一部欠号あり。

限られた掲載記事から2名を紹介します。予科理科教練教師の高松一雄歩兵少尉は、昭和15（1940）年5月、富士山麓での予科理科（2年制）1年生の野外教練で指導中、応召の報に接しました（『日本大学新聞』338号、昭和15年6月5日付）。1年後、出征先から便りを寄せていますが、伏せ



大澤釜右衛門砲兵大尉
「日本大学専門部商科卒業記念(写真帳)」

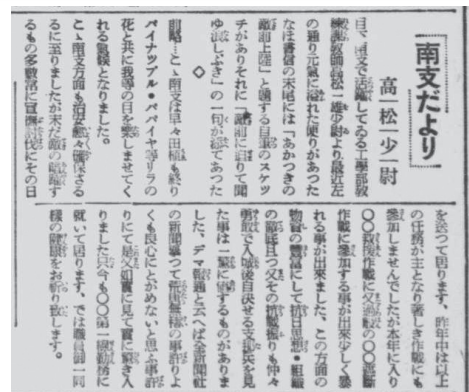
字が3カ所にみられます。

応召による入隊は、戦地への出征をイメージするかもしれませんが、部隊勤務以外の事例もあります。軍医や歯科医官が陸軍病院など内地での配属があるのは

想像に難くないですが、兵科でも、官庁勤務があります。専門部（商経科担当）の教練教師大澤釜右衛門砲兵大尉は、昭和16年に応召により陸軍省勤務を命じられ、17年に召集解除され本学に復職しています（『日本大学新聞』379号、昭和17年4月10日付）。

『日本大学新聞』は昭和19年夏には休刊となるため、教職員の出征者・入隊者についての調査は、今後は、他の資料から進めていく予定です。

（高橋）



『日本大学新聞』360号
（昭和16年6月10日付）

『昭和七年版 日本大学文科試験問題集』について

令和3（2021）年3月、加藤直人学長より『昭和七年版 日本大学文科試験問題集』の寄贈を受けました。入試問題ではなく、平常試験・学期末試験問題などが掲載されている資料で、当課ではこれまで未確認の資料です。他大学の大学史関連部署にも問い合わせましたが、学期末試験問題が掲載された今回のような資料は確認できませんでした。昭和初年の本学の教学面を知ることができる貴重な資料といえましょう。

本書はガリ版刷り（謄写版印刷）、B6判、並製、176頁で奥付によると昭和7（1932）年1月31日に発行された書籍です。発行所は川村書房、印刷者は比留間庄助とあり定価60銭で販売されていました。

まず、この書籍を刊行した川村書房について考えていきましょう。川村書房の住所は神田区三崎町一丁目二番地と記されていますが、これは現在の経済学部本館所在地となります。この書籍刊行当時、この校舎は予科校舎として使用されていたので、川村書房は予科校舎に関係のある会社であることがわかります。昭和7年1月20日付の『日本大学新聞』掲載の広告に「日本大学、各科教科書並新刊図書、参考書類 川村書店 校内東控室」とあります。「校内東控室」という場所は特定できないのですが、おそらく、予科校舎にあった「川村書店」で今回紹介する問題集が制作・販売されたと考えられます。ちなみに、印刷者の比留間庄助は、本郷区菊坂町（現・文京区本郷4丁目付近）で東京帝国大学（現・東京大学）講義録などの謄写版印刷を行っていました。

本資料には、法文学部文学科（哲学、倫理学教育学、心理学、国文学、漢文学、英文学、芸術学、史学専攻）、専門部文科、予科文科の試験問題が掲載されています。問題とともに試験日、担当教員が記されていますが、試験

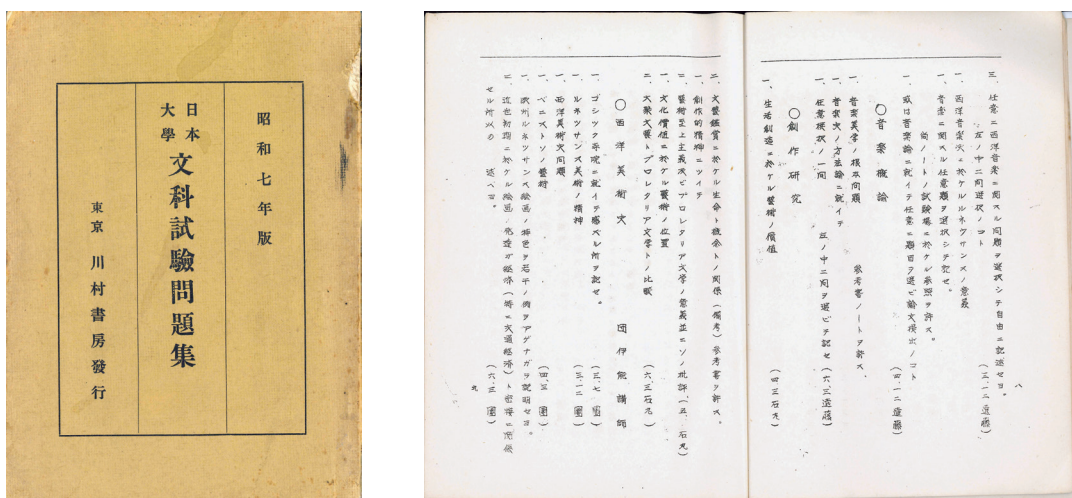
日は3月～6月が掲載されています。発行日が1月20日なので、学期末試験対策用として、前年度の試験や前期試験などの問題が掲載されていると考えられます。担当教員を見ると、哲学史は芸術学部の草創期を牽引した松原寛が担当し、史学科草創期の教員である羽仁五郎が歴史哲学、石田幹之助が東洋史概説を担当しています。また、金子堅太郎と交流があった団琢磨（三井財閥総帥）の長男である団伊能が西洋美術史を担当していました。団伊能は東京帝国大学で瀧精一に師事しており、瀧は本学文学科新設に尽力した人物であるため、瀧との縁で西洋美術史を担当したと考えられます。

実は、試験問題を紹介すること自体は、日本大学はかなり古くから実施していました。日本法律学校の時代に刊行されていた『法政新誌』には、明治31（1898）年7月30日付の第14号から進級試験・卒業試験問題が掲載されています。同号によると、試験問題は担当講師がすべて出題して「法学界ニアル者ノ大ニ研究ニ資スヘキモノ」であるため、総てを収録して満天下篤志家の答案を求むと記されています。ちなみに同号には、問題に対する回答も掲載されており、1年生理財の科目については学生時代の山岡萬之助の回答が掲載されています。

『法政新誌』は『日本法政新誌』『法律学研究』とタイトルを変更し、昭和10年から現在まで続く『日本法学』となりました。『法政新誌』というタイトルであった明治期は、機関誌が本書のみということもあり、学内情報が多く盛り込まれていました。しかし、法律以外の学科の増加や、『日本大学新聞』や『日本大学学報』など学内情報を掲載する刊行物が増えたこともあり、次第に学内の動向を示す記事が少なくなりました。昭和7年頃は試験問題が学内刊行物に掲載されていなかったことから、今回紹介した試験問題集が発行される需要が高まっていたといえるでしょう。

昭和初年の本学は、関東大震災からの復興を遂げて最初の拡張期に入ります。いわば総合大学の基盤が整備された時期となりますので、本資料やその他の資料も踏まえながら、この時期の本学の教学面についてさらに調べていきたいと思います。本資料をご寄贈いただきました加藤学長に御礼申し上げます。

(松原)



『昭和七年版 日本大学文科試験問題集』

日本大学に在学した日本初の「婦人警察官」

昭和21（1946）年3月、日本で初めての「婦人警察官」が東京都に誕生しました。これは、戦後の警察民主化の一つの試みとして、GHQの示唆を受けて実施されたものです。警視庁が日本で初めて採用した女性の警察官は約60名。年齢、学歴、職業、経歴もバラバラの彼女たちは、先達のいない「男の世界」で、新たな道を切り開くべく奮闘しました。

この初の「婦人警察官」の中に、日本大学的女子学生たちがいました。今回は、この中から玉井照子（法学部）に焦点を当てて、彼女はなぜ警察官になったのか、また、当時の女性の警察官とはどのような存在であったのかについて紹介したいと思います。

玉井照子は大正9（1920）年頃に石川県に生まれ、戦前は、昼は会社で事務員として働きながら夜学で速記術を学んで生活していました。彼女が本学に入学した正確な時期や動機は現在のところ不明ですが、警察官の仕事の傍ら本学に入学し、昭和28年3月に法学部法律学科（二部）を卒業したことが確認できています。よって、本学法学部が新制大学として発足した昭和24年4月に玉井は入学したのではないかと推測されます。

さて、玉井は警察官に採用されて間もない頃に、出版社からの依頼を受けて『婦人警察官の手帳』と題した手記を出版しています。同書では、警察官に応募するに至った彼女の女性の職業に対する考え方や、実際に採用された後に感じたことが率直に描かれています。

玉井は昭和21年2月末に偶然新聞で「婦人警察官募集」の記事を読んだ時のことを、次のように振り返っています。

敗戦によつて日本は脱皮しつつある。男尊女卑の封建的迷妄を打破し、女性も一個の社会人として遇することの試案が、さゞやかではあろうが初めての国家的な企画として、公然と発表せられたのだ。これは日本女性史上、いや日本の社会史上、まさしく画期的な事実ではあるまいか。

そもそも玉井は女性が働くのは結婚までの腰掛と見られることについて不満を抱いていました。故に「一生の仕事とするに足る技術を身につけて立てば、社会の私たちに対する見方も、いさゝか違ってくるのではあるまいか。」という気持ちから速記術を習得しようと奮闘していた玉井にとって、女性が警察官となって自立できるということは非常に魅力的に思えました。未知の職業への多少の不安を抱きつつも受験した結果、見事合格します。

ところがいざ婦人警察官として採用されてから、新たな事実を知ることになります。それは、婦人警察官とは「警察官であつて警察官ではない」ということでした。彼女たちの身分は「警察書記（主事）」とされ、独立して職務執行ができず、男性警察官の補助的な存在にとどまりました。玉井はこのことを「婦人警察官という名で募集されながら、実際に当たってみると私たちに警察権がない、与えられないというのは、海のない港、絵のない絵本と同様、なんとどのどかなナンセンスであろう」と評しています。また、当時は女性の警察官そのものが珍しい存在であったことから、配属された交通課の業務で街頭に出た際には、人々が好奇心で見物に来たことを手記に認めています。

昭和21年8月、内務省は「婦人警察官設置要綱」を定め、婦人警察官の身分や待遇を男性同様とすることとしました。これを受けて警視庁では同年11月に第一期採用の婦人警察官の身分が警察書記から警視庁巡査へと切り替えられます。これによって玉井をはじめとする東京都採用の婦人警察官たちは、晴れて「警察官」



『日本大学新聞』第466号（昭和25年4月25日付）

としての職務を行えるようになりました。

昭和25年、玉井は試験に合格し、警視庁初の女性巡査部長になります。この時の合格者数は296名、うち女性は4名のみでした。受験者数は男性巡査の分しか判明していませんが、3,378名いたとのことなので、男性だけで考えても11倍超という高倍率のなかでの合格・昇進であったといえます。

前頁掲載の『日本大学新聞』記事にもあるように、玉井と同じく警視庁「婦人警察官」第一期生の二木富美子もまた、警察官と本学学生（高等師範部）の二足の草鞋を履きながら、初の女性巡査部長に昇進しています。二木についても別の機会に紹介したいと思います。

（上野平）

【主な参考文献】

玉井照子『婦人警察官の手帳』（朋友社、昭和22年）

活動報告

令和3年1月～令和3年6月
（大学史に関する活動）

○展示

令和2年12月18日

～令和3年3月31日

4月1日～6月30日

「新制日本大学の出発」（日本大学会館2階）

「第7代総長高梨公之と日本大学—高梨家寄贈資料の紹介—」

（日本大学会館2階）

○講演・報告

4月12日

4月14日・28日

日本大学豊山中学校・高等学校 学祖講演

目黒日本大学高等学校 学祖及び大学史講演

日本大学大学史ニュース 第21号

2021年7月31日 発行

編集・発行 日本大学企画広報部広報課

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24

TEL 03-5275-8444 FAX 03-5275-8094

印刷 株式会社 日本大学事業部